
実現予告小説『世襲廃絶の日』

遊刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実現予告小説『世襲廃絶の日』

【Nコード】

N6667F

【作者名】

遊刃

【あらすじ】

世襲議員を排除するため、公職選挙法の改正案ができるまでの、コメディ風てんまつ。

（前書き）

民主党員の抗議殺到！

論文や雑誌記事は書いてきましたが、小説は初めてです。どうか、ご指導を。

おもしろくない所、わかりにくい所はすべて書き直します。

- - - - -

150人の国会議員のポストが空きます！

実現予告小説 『世襲廃絶の日』

田中雄二

「今さら国替えができるか！」

「立候補の権利を奪うな。憲法違反だ！」

「議員の子だけ立候補できないのは不当だ」

「私たちだけ議員になれないのはおかしい」

「不公平だ！」

二世議員たちが断末魔のような叫びを上げて口々に自分たちの窮状を訴えるなかで、ひととき目立ったのがこの「不公平」という言葉であった。

浜田靖一という代議士が太い首を震わせながら叫ぶ声は、その一瞬だけ父親の野太い声^{ほうごう}を彷彿とさせた。彼の父はハマコーこと浜田幸一である。

幸一は、若いころ人を刺して1年の実刑判決をくらい、任侠団体稲川会の初代会長を尊崇し、武闘派議員として数々の武勇伝を持つ。ハマコーがドスの聞いた声で一喝すると、まわりはいつも一瞬静かになったものだ。

福田元総理の息子のやはり元総理は、自分の議席から、中曽根元首相の息子（参議院議員）は、二階の傍聴席から、それぞれ大声を出して叫ぶ。

任期途中で倒れた元首相小渕恵三の娘は、かん高い金切り声で、不公平！と叫び続けた。その声は、暗闇を流す屋台のさびしいチャルメラの響きにどこか似ていた。それは父恵三が、高くそびえる福田・中曽根の二大巨頭と同じ選挙区で苦勞し続け、自らを「ビルの谷間のラーメン屋」と称したなごりなのだろう。

新しい法律のもとでも、選挙区を替えれば立候補できる。しかし、彼らが当選する見込みはまったくない。

二世議員たちが議長席に殺到して審議打ち切りに抗議する中、たった一人席に座ってじっとしている者がいた。

北海のヒグマと言われながら自ら命を絶った中川一郎の忘れ形見、昭一である。彼は、選挙区を代えての選挙戦に自信があるのか、腕を組んだまま一言も発しなかった。

採決のための投票は20分後に開始された。そして1時間後、賛成301票、反対178票、中川の棄権1票をもって、公職選挙法の改正案が成立した。こうして二世議員は親兄弟から引き継いだ選挙地盤からの立候補ができなくなった。

時に9月12日午後6時32分。1889年（明治22年）に選挙制度が誕生してから120年あまり。このたびの改正は、すべての成年男子に選挙権を与えた普通選挙以来の大変革であった。

。以下は、この日に至るまでの経緯である。

アメリカ・テキサス州の地盤を父親から受け継いだジョージ・ブッシュが失策を重ね、そのおかげで大勝した黒人大統領の就任式が終わった1月も末のころ、ネット上にひっそりと次のようなブログが登場した。それは珍妙な文だった。

――

公平同盟 綱領（案）

古人は言つ。

「切るが如く、磋^なでるが如く、啄^{たた}くが如く、磨^こくが如く、かくして石は玉^{ぎよく}と成れり」と。

――
――
――
なんじゃコレ？

ここまで読むと、せっかくこのサイトをのぞいてくれた女の子も、その9割は100分の4秒で他のブログにジャンプし、男性の多くも三歩引いて、わずかな者だけが続きを読んだ。

――
――
――
かくして石は玉^{ぎよく}と成れり」と。

ダイヤモンドの原石は、磨かなければただの石である。カットし、形を整えなければ、まぶしい光も生まれない。人も同じである。

複数者たちの切磋琢磨によつてこそ、粗雑なアイデアが洗練されて千金を生み、素朴な思いは昇華されて数々の制度を作り出す。こうして人類は繁栄してきた。

この繁栄を持続させるために、切磋琢磨への参加に制限があつてはならない。あらゆる階層のあらゆる人々が知恵を出し合うことによつてのみ、真によきものが残るからである。

――
――
――
どうやら四字熟語「切磋琢磨^{せつさたくま}」の講釈らしいの

だが、ここまで読みきつた者は、数人だった。この人たちは並はずれた読解力とやさしい心の持ち主なのだろう。最後まで根気よくこの難文を読んでくれた。

――
――
――
：切磋琢磨：真によきものが残るからである。

しかし、近年の政治において、参加は著しく制限され、切磋琢磨を望むべくもない。したがって政治に進歩がみられない。

政治の進歩をばみ、社会の向上を妨げるものは何か？

それは世襲だ！

わが国の政治における世襲の弊害は見るに耐えない。無能者たちはその血統のみをもって政治家の地位を独占し、有能な賢者による指導の機会を奪っている。

そこでわれわれは、公職選挙法の改正を通じて政治参加における不公平を正し、国民のために政治家が真に切磋琢磨する場を提供しようと決意した。

無能者を国政から排除し、有能な人材を政界に供給することはわれわれの心からの願いであり、この願いに基づくわれわれの行動は日本の未来に貢献するであろう。

この思いに賛同する人々の参集を広く呼びかける。

公平同盟 発起人代表 某

規約

第一条……

この文に続いて図のような資料と説明があった。三名だけの読者が図をながめる。

「歴代首相選抜年表」

明治 大正 昭和 平成

戦闘選抜 〃〃

試験選抜 〃武官〃

同上 〃文官〃

世襲選抜 ・ 〃〃

選挙選抜 ・ ・ ・

「詳細年表はパソコンのみ<http://happytown.oraooo.com/yuji-tanakaka/>」

この図は歴代の総理大臣がどのような選抜形式によって選

ばれてきたかを示したものです。最初のころは幕末の殺し合いの中で生き残った者たちが交代で政権を維持していました。いわゆる「藩閥政治」です。これが明治18年から34年まで16年続きます。

次に入学試験や採用試験によって選抜された官僚の政権運営が、明治34年から平成5年まで92年続きます。この試験選抜は二つに分かれ、最初は士官学校を採用ルートとする軍人すなわち「武官」であり、後半が旧制高等学校、帝国大学、および高等文官試験を経て採用される「文官」です。

この間、選挙選抜による原敬や田中角栄らの内閣、あるいは世襲選抜による近衛文麿の内閣などがありますが、大きな流れは、戦闘選抜から試験選抜へ、そして試験選抜の中で武官から文官へというものでした。

この流れが変わったのが平成3年の宮沢喜一の時です。彼は官僚であると同時に二世議員でもあり、彼以降、総理大臣は二世あるいは三世の議員による世襲です。また、各省大臣の多くが二世議員であることから見ても、選挙選抜のきざしはまったく見られません。

戦闘、試験、および選挙は、いずれも実力による選抜ですが、世襲はそうではありません。無能でも選挙区を引き継ぐことができます。これが世襲選抜の第一の欠点です。

また、世襲選抜は、有能でありながら地盤がないために議員になれない人々から不当に政治参加の権利を奪っています。

この不公平が世襲選抜の第二の欠点です。

――

ここまで、もう一人の読者が脱落した。

綱領（案）がネットに載って三か月。何のコメントも来ない。

そこでこのブログを作った某は、政治に関心のありそうな人に片っ端からメールを送って内容を宣伝した。そのかいあって、さらに二ヶ月過ぎたころ、コメントがやつと寄せられ始めた。

コメントに答える形でブログを更新し続けていくと、次第に意図を理解してもらえたらしく、賛意を示す内容のものが増え始めた。メール交換をする相手もできた。そこで某は次のステップを始めた。

いくらメールをやりとりしてもしよせんは画面上のこと。やはり生身の人間が会って話しをしなければ本物ではない。しかも通常のオフ会では困る。日夜起居をともし、絶え間なく議論を重ねてこそ、運動を持続させる力が生まれる。議論は白熱時には拳がとびかう。そのような対話が生まれる場所、それは昔から「たまり場」と呼ばれてきた。

そうだ。たまり場だ！

（某は一人で盛り上がっていた）

準備しなければならぬのは、仲間を求める人たちが集い、話しをぶつけあうことのできるたまり場なのだ！

このような妄想に一人燃え、興奮で夜も寝られなかった某は、事務所でなく、寝泊りのできる3LDKのマンションを借りた。所は、「国会議事堂前」駅のある千代田線と山手線が交差する西日暮里駅から徒歩5分。場末だから賃料は月17万5000円。

ただし、払うのは夢見る某でない。

このたまり場を借りるにあたって、ブログで、月30万円の寄付を、一口わずか百円で募集した。匿名希望の寄付者は男女とも「鈴木一花」とすること、寄付者の氏名は祭りの掲示板のように、「金三万円 鈴木一花様」と大書して扉の面に張り出すことなどを説明した。

最初の綱領案を出した時の無反応が身にしみていたので、某は、こんな募金をお願いしても反応があるのは半年後くらい

だろう、と覚悟していた。しかし、なんと翌月には目標の30万円に到達してしまった。

世の中には物好きがいるのか、はたまた、画面中央に置かれた帽子が見る者のあわれをさそったのか。

寄付の入金が確認されると、寄付者に感謝メールが送られる。そのメールに記されたサイトをクリックすると、画面にカウボーイハットがあらわれ、自分が寄付した金額、たとえば300円なら、百円硬貨三枚が帽子の中に投げ入れられる。同時に、スーツを着込んだ男性がきつちり90度腰を折って頭を下げる。それをもう一度見ようと思って同じサイトにアクセスすると、今度は、白地に黒い文字だけで、

「ご寄付ありがとうございました。またのご支援を心よりお待ちしております」

という味気ない画面しか出ない。何度やってみても、もう二度とおじぎ動画は出ないようになっていく。

某があとで着信ログを調べてみると、この「おありがとうございました」シーンを見るためか、二度以上寄付をした人がたくさんいた。金を与えて相手に頭を下げさせるのは、かなりの快感らしい。目標額達成の真の立役者は、このたわいもない御礼システムだった。

スタート資金ができたところで、わずかな家具を買いそろえ、公平同盟の最初の拠点オープンしたのが7月25日。最初のブログから半年たった。

某が朝8時半にマンションの鍵を開け、最初の来訪者を待っている、恐る恐る訪ねてきたのは19歳の大学生だった。

某はあいさつもそこそこに、「飲み物は何にしますか。コーヒーか紅茶、アルコールは夜6時からになっていますが」と言った

。しかし、その学生はとまどうばかりだった。某のその日の格好は、雪駄せったにジーンズ、そして上は、着古して首まわりが大きくひろがったＴシャツ。それがまずかったのかもしれない。ともあれ、初日の訪問客は１２名。年齢はやはり若者が多く、五十を越えた人は一名だけだった。みんな某と少しばかり話してその日は帰っていった。

このような日々が続くうちに、お茶係をかってでる者、食事を作る者、そのまま泊まって翌日鍵を開けてくれる者など、自然と役割分担がではじめ、秋には、４名がマンションに寝泊りして大学や専門学校に通うようになった。そして彼らが事務局を構成し、電話番号、ブログの管理、客の応対などをこなし、通いでやってくるボランティアの学生たちの組織もしてくれた。

困ったこともある。

住みついた学生の一人が京都の花園大学の３回生なので、学校はどうした？と某が聞くと、休学しましたとの返事。主催者としては親御さんに文句を言われないか少し心配である。この若者は福祉を専門とする地方議員になりたいという夢を持っていたのだが、はたしてこの場所がその修行にふさわしいものか。某にはまったく自信がない。

ともかくこのようにして人々が集まり始め、なんとなく各人の役割も決まってきたので、正式に政治団体「公平同盟」を設立するための総会を開くことにした。１２月時点での登録同盟員は３７８名。

といっても、準備に参加した人たちはいずれもこれまで政治活動に縁がなく、大がかりな会合の経験がなかった。もちろん、ホテルを借りてパーティーをした者はいるが、それではお金がかかりすぎる。団体設立前の募金はなるべくしたくない。

そんな時に救いの手をさしのべてくれたのが、かつてPTA会長として辣腕らつわんをふるった女性ブロガーだった。彼女はただちに、小学校の講堂の借用、机と椅子の手配、当日の作業人員の割り振り、分単位の進行表の作成など、

テキ！

パキ！

と、手際よく処理していった。

他の者はそのスピードに驚くばかりだったが、彼女にしてみれば、卒業式のあとに行く「お別れ会」の準備と同じであり、しかも花もいらず、飾りつけも不要とあつては、なんの造作ぞうさくもない。

会長の時に、死蔵されていた立派なこいのぼりを近隣の旧家から200本近く集め、それを一斉に校庭になびかせて子供たちを喜ばせた彼女にとつて、テールクロスを敷く必要もない今回の準備は、5グラムの減量より楽なのだ。

こうして総会が12月26日に行なわれた。

会場の入り口に奉賀帳を置き、署名した人をすべて発起人として設立総会はスタートした。席上、某以下の役員、綱領および規約が承認され、世襲廃絶のための選挙法改正を目的として運動し、その手段として国会に議員を送ることを確認した。

寄付金募集は総会の翌日から開始され、拠点を西日暮里の仮事務所から国会そばの赤坂に移すべく、とりあえず500万円を目標に資金を集めることにした。

懸念されたとおり、同盟のことが少しでも世間に知られるようになる、振込み詐欺と同じ手口で、＜公平同盟 寄付窓口＞を詐称するサイトがあらわれた。間違つて振り込んだ人もいたが、強力な検索エンジンでインチキサイトを常時監視し、見つけると、ただちに口座のある金融機関と所轄警察署に連絡したので、被害は最小限に食い止められた。

詐欺団の方も、口座開設は警察のマークが厳しいので、まも

なくナリをひそめたようだった。

こうして資金集めもなんとか成功し、翌年3月には目標額を突破した。そして念願の事務所は、地下鉄赤坂駅徒歩一分の所に借りることができた。

このたびも「たまり場」機能を重視し、なるべくたくさんの人に集まってもらえるよう夕方五時以降はすべての事務用品を片付けて机と椅子だけにし、入り口には縄のれんをさげて居酒屋の空間を演出した。そして、カマンベールとワイン、おにぎりとウーロン茶、お酒とビールを常置し、ただで一杯やれるようにした。

おつまみや軽食などは隣のコンビニで買ってきてもらうのだが、やはり「ただ酒」の効果は大きく、学生を中心に多くの人がやってきた。

ただでふるまわれる酒とチーズなどは、すべて現物寄付でまかなった。冷蔵庫で眠っているチーズやワインなどは捨てるに捨てられず始末に困っている人が多いと見えて、ネットで現物寄付を募集すると、すぐに締め切らないと集まりすぎるほどだった。

しかし、ウーロン茶だけは集まりが悪かったので、団体の経費から茶葉を買い、大きなやかんで煮出してふるまうようになった。

ここに集まって五時から騒ぐ若者たちの一部は豪傑気取りで天下国家を論じていたが、その内容は空疎なものだった。

「国会議員になる前にまず市長になるから、その時はお前に顧問を頼む」

「幼稚園の時に大統領になろうと決めたが、小学校の時、日本はそうじゃないとわかって総理大臣になろうと思った」

こんな政治青年特有の大志はまだ許せる。

「国を取る。権力を取る。一緒にやらないか」と言って迫ってくる若者の顔には、生ぐさい汗が浮かんでいる。みんながそいつを

避けるので、彼の周りには、いつも半径2メートルの空白地帯があった。

しかし、彼らの笑い声は底抜けに明るい。それは彼らに、どこまでも広がる夢しかないからだろう。この広大無辺な夢と笑いにひかれてやってくる年配の背広姿もあった。

たとえば、定年間近のある政治部の記者は、一度取材に訪れた時に事務所の雰囲気が入ってしまい、その後たびたびふらつとやってきて、一人熱爛をチビチビやりながら、背中で若者たちに応援を送っていた。

場所を確保し、人が集まると政治の勉強を始めた。勉強会は三部門に分かれ、政治家、行政官、ならびに研究者と在野の活動家を招いて話を聞いた。

二代目政治家の無能とわがままに辟易へきえきしていた

官僚たちは、政治における世襲廃絶にもろ手をあげて賛成しており、快く講師を引き受けてくれた。特に国政を志しながら庶民の生まれであるがゆえに選挙を断念して官職に留まっていた者は積極的に参加してくれた。

困ったのは議員を呼ぶことだ。自民党は事実上の党議拘束があるらしく、誰一人講師依頼に応じてくれない。民主党の議員も小沢一郎に気がねしてか、なかなかウンと言ってくれない。小沢一郎は二世議員なのだ。

小沢の父は、貧しさゆえに小学校を5年生でやめ、苦学して弁護士となり、地方議員を経て代議士となり、閣僚にまでなった人物である。彼はそのパワーから「闘牛」と呼ばれた。

二世とはいえ、数々の政変をリードしたきた一郎の力もまたすさまじい。彼のような実力者を落選させる政策を持つ団体に協力などできないのだろう。勉強会は結局、他党の議員を招く

ことからスタートした。

陳情も寄せられ始めた。そこでその処理が問題になった。政党としては公職選挙法の改正だけを目的としているのだが、それだけでは政治活動ができない。そこで、

1 人々は、苦情を処理し要望を実現させる見返りとして政治家に権力を与えている。

2 見返りは、多くの人に幅広く与えられてこそ政治の進歩がある。

という二つの原則のもと、交通違反のみ消しや裏口入学のあつせんは丁重に断り、愛犬を自由に走らせるドッグランの設置などは県や都に交渉を開始した。

公共事業の配分については、はじめから相手にされていないので、陳情処理は市民活動家のレベルで十分にこなすことができた。しかし、公共事業に、雇用を増やす大きな効果があることも事実なので、公平と効果の観点から新規の公共事業を提案することにした。それが「電柱の地中化」である。

これは電柱を禁止して電線を地中に埋設するというものである。都市の狭い道路では、自動車によって道の端に押しやられた自転車と歩行者が、電柱に邪魔されて通りにくい。事故の原因にもなっている。電柱がなくなることになって生まれる空間はわずか30センチだが、これだけの余裕が人と車の接触事故を防ぐのだ。

田舎にあつては、空を無^ぶ粋^{すい}に横切る直線を消滅させて景観を保護する。

この事業は、中央と地方で等しく行われるので公平でもある。

全国の道路の側溝を掘り返して工事をするので総工費はまああの金額になる。

この構想を発表すると、自民党に内緒という条件で数社が試算を申し出た。

しかしこの政策も、すでに行われているものを加速するだけに過ぎず、目新しいものではない。その点はみなよくわかっていた。国民に夢を与える、目のさめるような公共事業など、今の日本にはもうないのだ。ダムも道路も港も、もうみんな作ったじゃないか。もしかするとあるかもしれないが、どうせアメリカあたりで実行されたものが輸入されるだけだ。

同盟の政策立案チームは慎重だった。公共事業で新機軸を打ち出すことをあきらめた余波か、福祉面では何も主張しないことにした。

もちろん最初は提案も検討された。五十歳以上の人が介護に参加し、車椅子を押したり、入浴の手伝いなどをすれば、社会保険料の割引を受けられるという制度である。しかし、反対論が大勢を占めた。

わずかな利益誘導では人は動かない、もっと介護事情が悲惨にならなければ国民は動かない、たしかに自治体で始めた所もある、しかし国政レベルではまだ時期尚早だ、というのがその理由である。

提案の推進者は悲憤慷慨ひふんがいがいした。

「どうせ自分の仕事を増やしたくないんだろ。みんな、ちんまりまとまりやがって！」

と毒づく。そんな彼をなぐさめて、君の思いはいずれ必ず実現するよ、と言ってくれる人もいたが、彼は同盟を恨んだ。事務所のただ酒をあびるほど飲んだ後、つばを吐いて去る代わりに、大量のゲロを吐いて去って行った。

政策も決まったところでいよいよ選挙の準備を開始した。

しかし、候補者を決める前にまず選挙参謀を募集した。なぜなら政治業界というところは、議員に「なりたい」人はたくさんいても、「ならせる」人はほとんどいないからである。企画と演出の能力に^た長け、人を売り出すことだけに生きがいを感じるような人材は、芸能プロダクションにはたくさんいるが政治の世界には少ない。このような人材を募集したところ、面白い経歴の人たちが三人ほど集まった。

一人はもと小学校の先生。彼はアイディアが豊富すぎて校長やPTAとぶつかる日々にうんざりして塾の講師をしていた。もう一人は外食産業で長く新規出店を担当していた男性。あとの一人はベンチャービジネスが株式を上場する際のめんどろを見ている証券会社の女性課長である。

彼女は慶応義塾大学総合政策学部出身で、就職のための会社訪問をする際、どこに行っても、用意した資料をサツと広げた。そして、

「御社の経営は、コンポンテキに間違っています。そこで御社にご提案したいのは…」と自説をとうとうと述べ、50社以上回っても内定がもらえなかった。

説明の内容はいいかげんなものではなく、各社とも学生として集められる限りの情報を集めて研究し、その提案も、冷静に聞けばなかなか見どころのあるものだった。しかし、その態度がきらわれたらしい。

彼女の口調は自信を通り越して、傲慢^{しうまん}だった。内

定が取れずいらいらしてくると、その口上はけんか腰になり、「コンポンテキ」の「テキ」は！が加わった「テキ！」になった。この「テキ！」が、特に部長以上の年配担当者の胸につきささり、その神経をふつつりと切るのだった。

そんな彼女も、なんとか証券会社にもぐりこみ、自分がしゃべ

るのでなく、投資家向けにベンチャー経営者にしゃべらせる仕事をしているうちに、ずいぶん角が取れた。あいかわらず「コンポンテキ」は彼女の好きな言葉だったが、「テキ」の発音はずいぶんまるやかな「てき」になっていた。

そんな彼女をはじめとする三人が選挙の指揮を執ることになったが、彼らにはいずれも選挙の経験がない。そこで、ツテを頼って地方選挙の選挙事務所で修行させてもらった。

こうして政治団体としての体制が整ったので、いよいよ立候補者を決めることになった。とはいえ弱小政党なので戦力を一点に集中することにし、衆議院選挙ではすでにしっかりした組織ができあがっていた首都圏で2名だけ小選挙区候補を立て、比例代表では東京ブロックと南北二つの関東ブロックにだけ名簿候補を立てることにした。

しかし、この案には猛烈な反対が沸き起こった。

政治の集団に集まってくる人々は、いずれも一旗あげようという野心家ぞろいである。だから自分のデビューの機会を減らすことには極端に反発する。せっかく世襲廃絶に対する世論が高まりつつあるのに、顔を出す候補者が二人だけとは。しかも他党の候補者から推薦依頼があっても一切断するという。そんな馬鹿なことはない。もったいないではないか。国民の期待を裏切ってもいいのか！

これを反駁する執行部の理由は、力の集中で勝利を確実にするという単純な軍略だけだった。豊臣秀吉もナポレオンも、この原則を守って日本を統一し、ヨーロッパを征服したのだ、などとり返し解いた。しかし政治青年たちは納得しない。特に大票田の京阪神をどうするかが焦点となった。

大都市でムードを盛り上げれば勝つという議論はわかるのだが、この地域には組織がまったくなく。ムードだけでは小選挙区で勝てない。しかもムードに頼って票をもらうことは、選挙民を感情にしか左右されない存在として侮辱することではないか

。そんな議論が繰り返されたのち、結局、小選挙区に候補者は立てず、定数29の近畿ブロック比例代表に名簿候補者を立て、組織を作りながら戦おうということになった。

立候補者の募集にあたっては、書類選考は一切しなかった。その代わり、

「自分を信頼して応援してくれる人を十五人集めてください。その人たちにお話をうかがってあなたの資質を判断します」という文言で志願者を募った。この「十五人」という数字は、信用できる古株の政治コンサルタントが長い経験から割り出した値である。

この採用基準はかなりハードルが高かったらしく、応募期限の六ヶ月を過ぎた時点での志願者はわずか五人だった。しかも、そのうち二人は面接日に支援者が数名欠席したので失格となった。

のこり三名について支援者面接が始まったが、この面接だけで、志願者の人品、能力、こころざしなどが露骨なほどよくわかった。一人の志願者の支援者たちは、あきらかに無理やり集められたようで、面接者の問いかけに対する答えに熱意が感じられなかった。

ところが、残り二名の候補者の支援に集まった者たちは、いずれもその当選に命をかけてもよいといった熱気をたたえていた。したがって、選考はあつけないほど簡単に終わり、この二名を公平同盟の公認候補として決定し、物心両面の面倒を見ることにした。

選挙区は石原慎太郎の息子石原宏高の東京3区、および元首相小泉純一郎の二男が地盤を引き継いだ神奈川11区だ。

小泉家四代目に挑むのは同盟の事務局長をつとめる30歳の男性。早稲田大学政経学部を出た彼は、日本生命に3年勤務して資金をため、アメリカに留学してハーバードの大学院で公共政策の修士号をとって帰国し、参議院議員の政策秘書を経て公平同盟の門をたたいた。

東京3区で戦うのは、東大農学部を出て東京都公園緑地課につとめていた女性で、31歳、一児の母。いずれの候補者にも地盤と看板はない。しかし時間だけはあるので、オーソドックスな選挙準備を行った。その中心が後援会づくりである。

友人を誘ってお茶会を開いてもらい、そこに候補者が顔を出して話をするというのが理想であったが、たいていは、すでに後援会に入った人の案内で居宅を訪問し、玄関先で少しばかり話しをさせてもらっただけだった。これを毎日繰り返す。相手が男性の場合は、行きつけの飲み屋で集まってもらい、そこに候補者が顔を出すことも多かった。

話が終わると後援会名簿に名前をかいてもらっただが、その時、

「応援していただくお気持ちのあかしとして硬貨を一枚だけください。1円でも結構です」

といってハンコがわりにワンコインをもらう。支援する者とされる者の簡素な儀式だが、心の通う度合いはぐっと高まる。

最初は百円もおうという意見もあったが、ワンコインに落ちついた。ハンコを持ち歩かない人は多いが硬貨を一枚も持っていない人はいないので、これは成功した。

後援会員の七割が投票してくれるとして、当選ラインは東京三区で16万票。だから集めるべき会員数の目標は11万2千人。毎日百人獲得したとしても1120日かかる。これではとうてい投票日に間に合わない。

地盤と看板はないが、時間だけはあると思っていたのだが、その時間もないのだ。

それがわかったのは候補者を決めてから3週間後だった。そこで、ボランティアを募り、手分けして各戸訪問をしようと考えた。しかし、そう簡単にボランティアは集まらない。

事務所でタダで飲んでいる学生たちに期待したのだが、意外にも動きがにぶかった。飲み食いは得意でも、いざ働くとなると誰しも腰が引けるのだらう。特に、毎晩よく飲み、よく談じて、みんなのリーダー格と目^{もく}されていた男は、自分の足を使うことになるとまったく役にたたなかった。

寄付金募集には知恵をしばった。

寄付を集める時には、寄付の目的をできる限り明確にしなければならぬ。ただ、寄付してください、では迫力がない。椅子がないんです、机がないんです、だから寄付してください、と言う方がわかりやすい。

そこでまず、「ポスター基金」と称して、使途を街頭ポスターづくりに限定した寄付金募集を行った。

あなたのお名前をポスターの裏側に印刷します、と説明しながら、一万人から一口2000円を集めて2000万円を達成した。それが、募金を開始してからやっと一年後。目的額達成後ただちに寄付者のもとに一万人の名をびっしりと記したポスターが送られた。

名前はアイウエオ順でなく寄付日付順なので、自分の名前を探すのにみんな一苦労していた。

冠婚葬祭にもまめに顔を出した。葬儀があれば三本の線香を香典として包み、結婚と聞けばお祝いの言葉のカードを持参する。

金を包まない香典袋はすぐに捨てられた。相手によっては、馬鹿にしているのか！、と怒られもした。

そこで、世間の常識に従えばいいじゃないか、香典に必要な金は別途募金すればいいじゃないか、という声もあがった。

しかし、募金をするにしても、「葬式基金」ではクライし、「香典募金」も変だ。そんなファンドに金を入れてくれる人はいないだろう。ここはひとつ辛抱して、故人をしのぶ気持ちで線香に託すという趣旨を理解してもらおう。愚直にいくんだ、ここはがまんだ。そのような議論が最後に勝ったが、要は金がなかったのだ。そして集める自信もなかったのだ。

葬式はこちらから押しかけるからまだよいが、結婚式に新郎候補はまず呼ばれない。お祝いカードを新居と両親宅にお届けするのが精一杯であった。

後援会作りを始めて1年たったところになると、いわゆる選挙に便乗して利を漁る、いわゆる「選挙ゴロ」たちがたくさんあらわれた。

著名人に会わせて、あとから数十万円の謝礼を要求する者などはまだかわいい方である。会計をまかせた人物がすべてカラ発注しており、総額300万を着服したまま姿を消したのにはまいてしまった。ポスターも宣伝カーもいつまでたっても来ない。その時はじめて不正がわかったのだが、もうあとの祭り。

横領された金額は予備費でなんとかやりくりし、あらためてポスターなどを発注したが、二度とこのような被害が起きないように、金の流れは、複数の者で、常時監視することにした。仲間を疑うのはつらいことだったが、監事をしてきている現役銀行マンの告白でそう決めた。

「恥ずかしい話ですが、ぼくは万引きをしたことがあります。過労でうつ病になり、それが直るころ、やたらハイになって、なんでもできるんだという気分になっていました。そんな時、な

んでもチャレンジだ！という気持ちで万引きをしたのです。

コンビニは狭いからやめて、スーパーでやりました。10回以上やっても全然平気でした。それで今度は、無銭飲食にチャレンジだ！と決めたのです。居酒屋で飲んで食べて、トイレに行くふりをして外に出て、そのまま歩いていると、店員がおっかけてきました。それで、走って逃げました。必死でした。

相手を振り切ってホッと一息ついた時、思いました。もうやめよう、って。このままではいつかつかまる。もう悪いことはやめよう、って。

おかしくなる時はだれにでもあるんじゃないでしょうか。人間はもろいものです。弱いのが人間なんです。いつ、どう変わるかわかりません。『魔がさす』とも言うじゃないですか。だから、いつまでたっても横領がなくならないのです。そして、だからこそ、横領をしないよう、その人を見てあげる必要があるのです。

ずさんな管理は罪作り。そう思いませんか？」

謹厳実直を絵に描いたような銀行員が、その体験から得た教訓に、執行部はみんな納得した。

彼の懺悔ざんげによってできた厳しいチェック体制のもと、選挙ポスターは再度発注された。それができあがったのは、そろそろ解散ではないか、と新聞が報道しはじめたころである。

デザインは白地に赤く『プロジェクト日本』と染め抜いたもの。

この文言はジャッキー・チェンの映画『プロジェクトA』、NHKの『

プロジェクトX』に続く三番煎じであったが、新鮮さをもって人々に迎えられるはずだと、身内では確信していた。

しかし、「プロジェクト〜」も「ー日本」もありふれたキャッチコピーである。いくら大上段に、プロジェクト日本！とふりかざしてみても、その言葉自体に中身はない。はた目から見れば、陳腐で手垢てあかにまみれたコピー文に過ぎないのだが、

身内だけは燃えていた。どんな組織でもよくあることだ。

シールも作った。その形は二種類で、神社仏閣の門柱に貼られている千社札と、観光みやげでおなじみの三角錐ペナントである。このシールを学生や主婦が近所のおじいさんに連れられて一軒一軒売りあるき、ついでに後援会への加入もお願いする。

売り始めて三ヶ月たったところ、車の窓に内側から貼れるものはないのかと言われ、早速そのタイプも追加した。

若者がシールを売り、「プロジェクト日本」のポスターが町中に貼られ、秋も終り、冬も近づいたところ、当初の予想どおり、11月に解散、12月に総選挙が行われた。

神奈川12区の選挙戦は楽だった。三代目までは許すが四代目となるとさすがに人は許さない。まして純一郎が改革の成果を挙げただけに、息子に世襲させた父の固陋ころうぶりがめだつてしまい、「先代の純一郎が世襲でなく実力で勝ちあがった政治家だったならば、不良債権の処理だけでなく、ほかの改革も成功したに違いない」といった正論も飛び出す始末だった。

しかし東京3区の戦いは熾烈しれつを極めた。後援会員は着実に増え、公示日までになんとか7万人の名簿がそろつていたのだが、業界団体に入り込む余地はまったくなかった。唯一推薦がもらえたのは、候補者が毎日大根やにんじんを買っていた八百屋のご主人の尽力による、青果組合だけだった。

石原父が参議院全国区から衆議院に転じたのが1972年から、親子二代にわたって40年近い地盤を形成している東京都大田区は、もはや「石原王国」の様相を呈しており、忠臣たちが磐石の組織を築いていた。しかもわきをかためる渡哲也、館ひろしなどの「石原軍団」が連日選挙区にやってきて支持を訴え、選挙カーの周囲はいつも黒山の人だかりである。

対する公平同盟の方は、”世襲廃絶・実力本位”の趣旨に賛同したお笑い芸人たちが何人か応援にかけつけてくれた。しかし、それは圧倒的な力を持つ帝国軍の前で、絶望的な抵抗をするわずかな道化に過ぎなかった。

投票日が四日後に迫り情勢の不利がますます明らかになったところ、骨董品のような政治ブローカーが東京3区の事務所にあらわれた。一人一万円を票をとりまとめるから百万ほしいと言うのである。いまだきムラの選挙でも通用しない手法だし、値段も昔聞いた金額と同じだ。

「ええ、15年前と同じ値段です」

こう言われて笑いそうになったのは若い運動員だけで、のどから手が出るほど票が欲しい選挙参謀は、詐欺だとわかっていても心が激しく揺らいた。

しかしどう対処するかは前もって決めてあったので、そのマニュアルに従った。買収の金品を要求した者は公職選挙法221条違反として処罰できるが、参謀は彼を告発せず、やりとりの一部始終をビデオにとり、それを2週間ほどネットで公開した。ダブルのスーツにネクタイをきっちりしめ、正絹のポツケチーフを胸にはさんだ老紳士が、なごやかな口調で買収の手口を説明する画像は、一夜にして人気サイトとなった。

選挙区に入らない学生たちは『公平同盟』と書いたのぼりを持って全国各地に飛び、主に駅頭で選挙法改正への支持を訴えた。彼らはサウナに泊まって宿代を浮かすことにしていたが、うちへ泊まって行けと言われてしばらくご厄介になる者もいた。

宿を提供されなくとも、大分で叫んでいた者は関サバ定食をおごられ、札幌で歩きながらハンドマイクを使っていた女子学

生はバターラーメンをこちそうになった。

彼らは托鉢する僧のように寄付の皿も持って行つたが、連日千円札を中心に多くの浄財がなげこまれ、投票日までに総額で3429万6825円が集まった。

政治団体としては関東と近畿以外の比例区に候補を立てていなかったのだが、「公平同盟」と記した無効票が数多くあつたと選挙管理委員会から後日発表された。

しかし選挙期間中、同盟内部ではとんでもないことが起きていた。大失態は比例区で発生した。

比例区の名簿候補者は、その者が選挙区の支持者名簿を集めた数で決めた。この時、東京3区と神奈川11区の数はいくつに計算した。つまり、小選挙区とブロック選挙区で大きく貢献した者が候補者になれるのだ。

もちろん架空名簿もありうるので、無作為抽出で名簿掲載者の5%に電話をかけ、「今度の選挙には間違いなく私どもの候補者に投票していただけますね」と言つて、本当に足を使つて集めた名簿かどうかを確認する。

この電話かけはパソコンを使えないお年寄りをお願いした。同盟は、運動も業務もすべてネットを通じて行っているの、どうしてもパソコンに慣れない高齢者を組織に取り込めない。そこで、電話や訪問などは極力この人たちに活躍してもらふことにしていた。

ただし、確認すべき名簿の送付、確認の結果などの連絡はすべてネットで行うので、おじいさんとおばあさんにはサポーターをつけ、一緒に作業をしてもらつた。これは、少壮と老年の双方に、同じ釜の飯を食つて苦労してもらふことで、運動への支持がより一層深まる効果を狙つていた。しかし、トラブルはここで起

きた。

確認すべき作業リストは本部がとりまとめ、各サポーターに配信され、サポーターはそれを紙に打ち出して担当のおじいさんかおばあさんに渡す。そして時には一緒にお茶を飲みながら、電話をかけ、結果を用紙に記録する。それをサポーターが入力して本部に送る。

このような手順を二人がこなすのだが、カゼなどで電話手が交代すると、交代要員を手配するために2手順増え、二人だった参加者が三人となり、その結果「7手順三人」となる。

伝言ゲームと同じく、プロセスが増えれば増えるほど、間違いが増える。事故はこうしておきた。

検査入院のため電話手のおばあさんが作業開始前に交代することになったので、サポーターがそれを本部に連絡した。サポーターと高齢者は一体なので、本部担当者は別のユニットを作業にあてることにし……。

担当者（女性）はここから先を間違えた。公示前ではあるがすでに事実上の選挙戦に入っているので、本部は戦場である。その混乱の中で彼女は、やっと探し当てた代わりのユニットに、本来ほかのチームに送るべきリストを送ってしまった。しかも大量に。

受け取ったがわは、何の疑いもなく必死に電話かけをする。

しかし、50倍の分量を受け取ったため、50分の49の確認作業ができない。こうして、立候補締め切りの日になった。

他方、リストの到着を待っていた人々も、他の仕事があったので、何の疑いも持たず、誰一人本部に催促しなかった。

また、ミスをした本部担当者も、自分の間違いに気づくどころか、確認結果の報告があがって来ないことにいらだち、同僚にむかって、「トロイことやってんじゃねえよ。まったくC班は……」と口汚いことばで軽口をたたいていた。

しかし、いくら待っても報告がないので、リストを送った相手に

きつい調子のメールを書こうとした瞬間、彼女は気がついた。もしかしてリストを送り間違えたのではないか？

全身から汗が吹き出すのを感じつつ、彼女は送ったリストを調べた。C班は50のチームで構成されるはずだが、刹那（せつな）の直感で思ったとおり、すべてのリストを一つのチームに送っていた。

もう時間がない。これ以外の支持者名簿はすべて確認を終え、集計表には、76%、69%、91%といった名簿の信頼度を示す数字がならんでいる。名簿の支持者数はこの数字をかけて割引される。

自分の失敗を告白し、空欄のまま報告するか。いや、それはできない。そんなことをすれば、この名簿を必死で集めた立候補志願者に申し訳ない。C班の確認対象は二名の志願者。この二名が集めた支持者数は第3位と12位。自分が叱られるのもいやだが、二人の努力をむだにすることはもつと悪い。途中経過だけど、71%という数字は来ている。50のうちあとの49も問題なからう。いや、ないはずだ！

彼女はこのように自分自身に説明した。

でも、マズインじゃないの？

この疑問を投げかけるもう一人の自分は、神様をお願いして罰してもらった。

そして彼女は、この71%という途中数字を第12位の志願者に、71を少し丸めた69という数値を第3位の者の欄に入力して送信した。

こうして69という数字をもらった人物が候補者になってしまった。

この男は軽い気持ちで支持者集めによる候補者選びに参加し、最初から実際に動くつもりはなかった。名簿は、電話帳から適当に作り上げた。そして、彼のように徹底して架空の名簿を作るような参加者は他にいなかった。だから50分の1のリスト

でも、確認結果はまああの数字71%だったのだ。

さらに、この詐欺師のカラー名簿は、まったく電話確認されていない50分の49のリストの大半を占めていた。

彼が南関東ブロック名簿順位4位の候補者として認定された時、どうせこんなミニ政党などに票が集まるわけではないと思っていたので、候補者になったと言われても何の感慨もなかった。

それでも、選挙期間中は本部に毎日顔を出し、支持者のもとに行くと言って外出していた。もちろん、同盟のためには何もしない。気持ちもないが、そもそも手段もないのだ。

そんな彼でも、ブロック当選者が増えて、自分も国会議員になるとわかった時は、ほんとうかよ、マジかよと、大きく、しかし心の中だけで叫んだ。彼も本部につめて他の候補者たちと開票速報を見ていたため、バンザイ以外の声を上げることが許されなかったからである。

男の不正がわかったのは、選挙が終わって2週間経ったところである。彼の言動がどういき目に見ても粗暴かつ野卑なので、念のため、支持者名簿をあらためて検査したのだ。その結果、実在の人物は一人もなく、名簿がまったくの虚構だったことがわかった。

執行部はあぜんとしたが、もうどうしようもない。ただちに彼を除名し、次順位の名簿候補者をくりあげ当選させる手続きを取った。

マスコミへの公表はこれより早く、彼の不正があった時点ですぐに謝罪会見を開いた。これは危機対応マニュアルにそった行動である。

マニュアルは市販本をまる写ししたもので、もとの本は古典を引き、「孔子^{いわ}曰く、改むるに憚^{はた}ることなかれ、と

。いさぎよく非を認めて陳謝することが早ければ早いほど、非難を支持に変えるきっかけが生まれます」と説いていた。

なるほど！

マニュアルを作ったとき、執行部はひたすら感心した。彼らは平凡人の集まりであり、危機などに出会ったことがない。あえて危機の経験を探しても、その内の一人が直面した「浮気の発覚」「くらいしいかない。それすら、「危機対応」に失敗しており、彼は熱いアイロンを背中に押し付けられている。

その本はさらに言う。

「人前で謝罪する人数は、絶対に三人です」

その教えどおり、会見では、三名の幹部が雁首がんくびそ

ろえて90度に腰を折り、「申し訳ございません」ときつちり頭を下げた。パシャパシャパシャというお決まりの音がそれに続く。

三名である理由については、「二名以下だと、誠意がないと受け取られます。また、四名以上だと、頭がバラバラに下がってしまりのない印象を生み、謝罪対応でもっとも必要な『いさぎよさ』イメージが演出できないのです」と説かれている。

冷静に考えると、3人も4人も大した違いはないのだが、危機に遭遇した経験がない幹部たちは、誰も疑わなかった。

その幹部連中は内部から猛烈な非難を浴びた。

「危機対応のマニュアルをそろえるより、そもそも危機が起きないよう、事務のマニュアルを完備する方が先ではなかったのか

」

その通りなのだが、危機対応をうたう書籍は山ほどあれど、選挙事務のマニュアル、しかも実務に使える詳細なものは皆無だ。

そのことを心の中で思いながら、執行部は内部構成員に対して、ひたすら無言で頭を下げた。

しかし、失墜した信用を取り戻すには長い時間がかかった。支持者に対しても、世間一般に対しても。

ともあれ、この失敗が明らかになったのは選挙後だったので、選挙中の公平同盟は広範な支持を受けた。結果は次のとおり。

東京3区はやはり落選。神奈川11区的一名、比例区の東京・南北関東ブロック10名、近畿ブロック2名が当選し、衆議院に13議席を得た。3区の女性候補者は比例区への重複立候補をさせてもらえなかったたので、落選後は団体の広報責任者として働くことになった。

選挙期間中、公平同盟は「二世比率」という言葉を作って世論を喚起しようとつとめていた。これは親兄弟が地方議員・首長・国会議員だった議員の割合である。

議席数が確定するとただちに新聞各紙に二世比率が掲載され、その数字「49.2パーセント」を見て同盟幹部たちは大いに喜んだ。なぜなら、半数にわずかに足りないこの数字によつて、「いま制度を改正しなければ、次の選挙で議員の半分が世襲になりますよ、それでいいのですか」と国民に訴えかけることができるからである。

新人議員たちは当選の興奮も冷めやらないうちに早速多数派工作を始めた。翌年の正月あけから彼らは自民党と民社党の非世襲議員をたずね、説明し、説得し、時に恫喝どっかつした。法改正に賛成しなければ、先生の選挙区にわれわれの候補者を立てますよ、と。

公明党、共産党、社民党には世襲廃止に反対する理由が何もないので、簡単な説明だけですんだ。こうして、着々と味方が増えていったのだが、命を奪われるがわの抵抗もまたすさまじいものであった。その代表は世襲議員の父、石原慎太郎である。

かつて、

「部屋の英子がこちらを向いた気配に、彼は勃起した陰茎を外から障子につきたてた。障子は乾いた音をたてて破れ」

と記して旺盛な種族保存の欲求を表現した彼は、年をとつてもまだその欲望を保つていたのだらう。×××を入れた茶封筒を持って片っ端から議員たちの内ポケットにねじこみ、法案への反対を要請した。

しかし、性器を紙に押し込んでも子供が生まれないように、懷に押し込まれた×××は、砂漠にしみこむ水のようにあとかたもなく消えていった。

四ヶ月あまりで民主党の非世襲議員101名全員の同意をほぼとりつけた。自民党でも非世襲議員の大半が協力を確約してくれ、その数119名に及んだ。これで220票。これに公平同盟13、公明31、共産9、社民7、無所属諸派2を加えれば282票となり、過半数の240を大幅に上回る。ここまでの票読みができたのは、選挙から半年たった6月3日のことだった。

ただちに議員立法で公職選挙法の改正案が上程された。もし僅差の情勢ならば、を使った切り崩しによって形成が逆転される恐れもあるが、40票もリードしていれば裏切りはほとんどない。世襲廃絶の流れが決定的な以上、バスに乗り遅れた者にはきびしい非難が待っているからだ。

採決は同月14日に行われた。自民党の世襲議員が反対票を投ずるのは当然として、その他の議員たちが次々と賛成の札を入れる光景が続いた。しかし民主党の議員の番になると異変が起きた。彼らは一斉に反対票を投じたのである。

議席からも傍聴席からも一瞬、「オー」というどよめきが起こり、続いて聞くに耐えない怒号がとびかった。彼らは見事に裏切ったのである。

結局法案は賛成181反対299の大差で否決されてしまった。このニュースはただちにネットに流れ、ついで夜のテレビニュースのトップに報道される。

国民は憤激した。

改正案に反対した民主党議員の自宅にいやがらせが始まり、そのホームページには最新のコンピューターウイルスを乗せたメールが送られ、民主党本部の電話は殺到する抗議の電話で一時不通となった。

舞台裏で何が起こったのかはわからない。関係者は全員貝のように口を閉ざした。石原の×××が利いたとも、世襲議員たちの生存本能による巻き返しが成功したとも、二世議員である小沢一郎のしめつけが奏功したとも、あらゆる憶測が飛び交った。

公平同盟としては対策を協議した結果、抗議のデモをうつことにした。しかし、メンバーは誰一人デモに加わった経験がない。学生時代、過激派の覆面デモを冷ややかに見ていた世代と、そもそもキャンパスにデモなるものが存在しなかった世代しかないのです、デモをするにしてもどうしてよいやら皆目見当もつかなかった。

それでもなんとか古老からデモのやり方を聞き、とりあえずデモの期日と目標人数を決定した。デモの決行は7月24日、目標とする人数は10万人。はたしてこれだけの人数が集まるかどうか、まったく自信がない。かつての労働組合は組合員に手当てを払って動員をかけたものだとも聞いても、公平同盟にそんな金はない。

しかたがないので、ネットで「7月24日、東京駅から国会議事堂まで、歩くオフ会をしませんか」という呼びかけをした。公職選挙法を改正しよう！などという政治的メッセージを流しても、相手が引くだけだということは確信していたので、政治めいた内容は一切掲示しなかった。

政治青年たちからは伝統的なスローガンが主張されたが、「セイジ」と聞いただけでうさん臭いものを感じる者たちが執行部の過半を占めていたので、激論の末、脱政治的宣伝に終始し

た。

しかし国民からの反応はなかなかよいものだった。そもそも、祖父母からデモに行つた思い出を語られたことのある若い世代は、デモに淡いあこがれを持っていたのである。だから”デモを知らないあなた。一生に一度の思い出に、デモに行つてみませんか”というメールだけで集まってしまった、お気軽な「てゆうかデモ」のカップルも当日は多かった。

そのほか、親子連れの「デイズニールンドのついでにデモ」や、おばあちゃんたちの「^{すがも}巣鴨とげぬき地蔵のついでにデモ」などもあった。

道路の使用許可を取るため、事務局は前もって参加人数を把握すべく参加者をネットで募集しておいたのだが、当日はその人数をはるかに上回る人たちが押し寄せ、最終的な参加者は70万人を超えてしまった。（警視庁発表：71万3000）

その昔1960年（昭和35年）、日米安保条約に反対する人々が国会を包囲したデモは65万人であり、一名の死者も出している。しかし今回のデモにそんな悲壮な様子はまったくなくない。

行進する人々は、あちこちにちらばるストリートミュージシャンの音楽を聴き、テキヤの屋台で焼き鳥をほおばり、ボランティアが説明してくれる旧跡案内に立ち止まるといった具合に、日本最大の縁日^{えんいち}を楽しみながらのんびりと歩いていた。

当初の予定では東京駅だけに下車して国会をめざす予定だったが、一駅だけではとても乗客を降ろしきれない。そこで、運動本部はただちに隣の駅からの下車をすすめるサイトをたちあげ、アドレスの分かる人にはメールも送った。

東京駅の北は、神田、秋葉原、徒町、上野まで。南は有楽町、新橋、浜松町、田町まで。これらの駅から次々と人が吐き出され、いずれもいったんは東京駅のレンガ駅舎をめざし、ついでまっすぐ皇居に向かい、皇居前広場につきあたると左に折れ

て桜田門の警視庁まで歩き、そこを右に折れて、あとはゆるやかな坂を登って国会議事堂まで。蟻の群れが行進を終えて蜜に群がるように、議事堂周辺は人間に埋め尽くされた。

議事堂に至るまでに人の流れがもつとも滞ったのは、桜田門周辺だった。名所案内の担当者がスピーカーで、

「桜田門には、外桜田門と内桜田門があり、外桜田門に面しているのが警視庁です。幕末に井伊直弼が暗殺されたこと有名なこの門の名は、もともとここに桜田さくらだという村があ

ったことに由来し…」と説明すると多くの人が足を止め、

「俗に桜田門とも呼ばれる警視庁は、1874年、明治7年に首都東京を守るために創設され…」と始まると、せつかく流れ始めた群集がまた、足を止めてしまう。

その屋台は大繁盛で、黄色いカラシと真っ赤なケチャップをかけたアメリカンドッグをほおばり、パステルカラーの粒チョコをまぶしたチョコレートバナナをなめる人々が大勢いた。中には、道路わきに座り込んでじつくりと名所案内を聞く者もいた。

警備にあたる警察官たちは最初のうちこそ殺気だっていた。

群集たちが指定ルートからはみ出し、勝手に立ち止まり、時には元に戻るからである。しかし、このデモが平和的で楽しそうなものなので、途中から進路規制はあきらめ、もっぱら気分の悪くなった人の世話やトイレの案内に終止していた。

このお祭り騒ぎは深夜になっても続き、翌朝の始発列車が動き始めると、人々は永田町や赤坂見附などもよりの地下鉄駅から三々五々帰っていった。

このデモが終わって三日後、公平同盟内にちよつとしたお家騒動がもちあがった。

同盟としては、選挙法改正に成功したあとの選挙は選挙活動

を一切せず、公認も推薦もしない方針だった。しかし、運動の高まりを見た幹部の中には、「一政党として候補者を立てるべきだ」と考えた者もいた。野心にあふれる若者が多く集まる組織にあつては当然の動きである。

しかし、執行部は頑としてその要求を拒絶し、同盟があくまでも選挙制度の改正を主眼とする運動体であることを主張した。そこで、業を煮やした者たちは分派を作ることにし、ただちに結党して「公平同盟 本部」と称した。デモからわずか二週間後の7月23日のことである。

幹部たちは動揺し、名称の差し止め請求の訴訟を起こすなどと息巻いていたが、同盟の代表者は「名前を使われて困るといふなら、こっちは『元祖 公平同盟』とでもしますか」と笑ってとりあわない。多少の混乱はあったが、国民の支持はやはり本家の方にとどまり、選挙に候補者をたてる前に『本部』は消えていった。

公平同盟の分派さわぎはあぶくのようにはいかないものだったが、自民党のそれはまったく異なっていた。それは単純な政治力学によるものである。

280名の自民党衆議院議員のうち、世襲は137名、非世襲は143名。幹部クラスはほとんど世襲議員に占められている。デモに国民の熱気を見た非世襲議員たちはこう考えた。

選挙法改正案の成立はもう間違いない。これに反対するなら次の当選はおぼつかない。現に否決した直後、支持者からの抗議の電話が議員会館や地元の事務所に殺到した。選挙法が改正され二世議員が一斉に国替えして立候補するなら、そのほとんどが落選し、自民党は一気に第一党の地位を失い、民主党が政権を取るだろう。それでは自分たちが困る。

しかし、二世議員を引退させ、これまで国政に出たくても出られなかった地方議員や首長を公認候補として自民党から立候補させれば、当選は確実だ。しかも、これまでの幹部がほとん

どいなくなるのだから、すぐに大臣ポストがまわってくるのは間違いないし、自分が内閣総理大臣になるのも夢ではなくなる。

誰もがこのように考え始めたので、あとは誰がこの動きのリーダーシップを取るかという問題だけになった。いち早く仕切り役に名乗りをあげたのは、副大臣を二回経験していた^{三三}であった。彼はテレビ中継される国会デモの様子を見るかたわらで、その熱気が乗り移ったように檄文をしたため、ただちに賛同者を募るために議員会館の中を回り始めた。同志が10名集まるとすぐに記者会見を開き、「新自民党」の結成を告げた。

といっても彼らは離党したわけではなく、今の執行部が退陣しなければ新党を結成し、新自民党の名のもとに、今の自民党の人的財産をすべて接收すると通告したのだ。

テレビで^{三三}たちの会見を見た閣僚や幹事長たちに衝撃が走った。しかしまもなくその感情は慟哭^{どうく}に変わった。流れが世襲廃絶にあることは彼らも肌身に感じていたからである。

非世襲議員による自民党内の多数派工作は、デモが鎮静化するのと反対に一層活発化し、公平同盟のお家騒動が終結したところには自民党総裁を決める選挙が公示された。そして投票では、国会の赤い絨毯を踏むことを夢見る地方議員たちの圧倒的支持を得て^{三三}が総裁に就任した。

^{三三}はただちに国会で総理大臣に指名され、組閣手続きに入った。この内閣は来る衆議院選挙^{きた}までの「選挙管理」内閣に過ぎないので、^{三三}はあえて世襲議員を閣僚に任命した。これらの大臣はマスコミから「お情け大臣」と称されたが、^{三三}が二代目たちに最後の花道を提供する代わりに^{三三}を総裁とする密約が、彼らの間にかわされていたのだった。

この内閣のもとで今度は政府提案として選挙法改正案が提出され、賛成多数で可決された。その様子は冒頭で述べたとおりである。

可決された条文は簡単なものだった。

「公職選挙法 第87条の3

その三親等以内の血族ないし一親等の姻族が昭和21年以降に立候補して公務員となった者は、それぞれの選挙区に重なる部分があるとき、その選挙区の候補者となることができない。」

三親等の血族とは叔父、一親等の姻族とは妻の父を指している。この条文で、子と孫はいうまでもなく、甥や娘婿も選挙区の地盤を相続することが不可能になった。

なお、この条の第二項では、立候補制限を国政だけにとどめた。だから、地方政治はまだ世襲が可能である。これには反対論もあつたが、地方自治まで世襲を禁止すれば、政治家の子弟は必ず生まれ故郷を離れて家業を営まざるをえない。憲法の保障する立候補権をそこまで制限することはできないだろうという議論が支持され、第二項が法文に盛り込まれた。

10月23日に衆議院が解散されると、議員たちは異様な高揚感をいだいてそれぞれの選挙区に帰っていった。相手を蹴落とし、自分だけが生き残るためのいくさが始まるのだ。

世襲議員の半数は立候補を断念したが、残りは選挙区を替えての選挙戦にのぞんだ。世襲廃絶の嵐の中、彼らへの風当たりはきびしかったが、特に慶応義塾の出身者には、塾を開いた福沢諭吉の言葉が浴びせられた。

福沢は、あふれる能力を持ちながら下級の士族であつたために無能な上級者がその身分だけで出世の階段を上っていく様

子をにがにがしく眺めていた。だから彼は、「門閥は親のかたき」と言つて死ぬまで世襲を憎み続けた。したがつて慶応卒の二世議員は、福沢先生の教えに背くのか！と言われると、反論のしようがなかったのである。

これまでの名誉と財産が砂のように崩れていくなかで、世襲議員たちのストレスは頂点に達した。ついに死者を出し、大臣を二期つとめた大物が公示日の前日にホテルで首をつつたと報道された。また、慶応出身の小沢一郎が胸の痛みを訴えて入院したのも同じ日であつた。

しかし、政治家を志す人々はかつてない大きなチャンスに心のときめきを抑えることができなかった。なにしろ百五十名を超える世襲議員たちのポストが一気に空^あいてしまうのだから

、これまで、どんなに優秀でも県議どまりで政治家生命を終えていた者たちは、血をたぎらせて国会議員に名乗りをあげた。

官僚たちもこれまでになく立候補した。国政にいくら関心があつても自分が二世でない限り、娘婿にでもならなければ議員は無理だ。行政官としての地位を捨ててまで国会に挑戦するにはあまりにリスクが大きすぎる。そんな懸念は今回の改正で吹き飛んでしまった。職を捨てて立候補したのは課長級が2名、課長補佐にいたつては23名が役所を飛び出した。

総選挙が公示された日、かつて公平同盟の設立を呼びかけた某は、規約第19条に従つて公平同盟の解散手続きを進めていた。選挙法の改正が終わり、政治における世襲廃絶の目的が達成されれば、同盟を解散する旨は設立当初から定めてあつた。

「これから暇になるが、なにをしようか。今度は高齢者向けのスポーツでも発明するか。ビーチボール水球なんかどうだろう。水

の中だから怪我はしないし、玉の奪い合いだから結構興奮もする。でも張り切りすぎて体がぶつかったらあぶない。

そうだ！

男が女の体に触れたら無条件で相手に1点与える。これなら不公平じゃないだろう」

そんなたわいのないことを夢見ながら、某はこれまでのことを振り返っていた。

…そう言えば、前回の選挙で比例区の連中にこんな言葉も贈っていたなあ…

「時の流れにくさびを打て！」

比例区の前回当選者は、一名が参議院に、二名が首長選挙に挑戦するほか、全員が主婦、研究者、実業人などに転進した。

投票日は二日後である。

参考文献

- 『内閣制度と歴代内閣』，首相官邸，
<http://www.kantei.go.jp/jp/rekidaichi/ichiran.html>
『選挙参謀、手の内のすべて』，鈴木精七，講談社，1995
『太陽の季節』，石原慎太郎，新潮社，1956
『シルバーが燃える ビーチボール水球』，田中雄二，蘊奥舎，

2012

伏字×××の扱いについて

×××のところに、「百万円」などと記入すれば、犯罪行為の描写となってしまうので名誉を毀損する可能性が大きくなりますが、「小さいころのわが子の写真」とすれば、子を思う親の熱情を描写するに過ぎず、なんの問題もないでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667f/>

実現予告小説『世襲廃絶の日』

2011年8月16日00時22分発行